図書館だより

第22号 2003.10

HAKUOH

白鷗大学
白鷗大学女子短期大学部

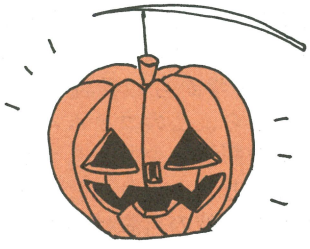
国際社会に向けた小さな準備

白鷗大学女子短期大学部講師
平田乃美

学生の皆さんもご存知の通り、白鷗大学では現在、人間の「こころ」と「からだ」の成長・発達を学際的に学べる新学部の設置が準備されています。新学部では、児童教育やスポーツ健康のスペシャリストの育成に加えて、いくつかのサブテーマが設定されています。例えば「国際的視野」「多文化理解」などです。これらについては、私自身もこれを機会に総合図書館の多彩な蔵書を活用して学んでいきたいと思っているところです。

国際感覚の習得といわれてまず思い描くのは、いろいろな国の言葉や文化・習慣を学ぶことや、論理的な思考のトレーニングなどでしょうか。また、国際交流は日本人が日本について知ることからなどともよく云われます。私個人としては、最近のニュースで戦争の映像などが流されるたび、こうした知識を活かす前段階として、「感じる」心と「伝える」技術が大切なように感じています。このことについて、身近な例として外国の方に日本について質問される状況を3通りほど想定して考えてみます。第一に、仕事や何らかの理由で日本について知りたい方が質問している場合を考えてみます。もし質問者が正確な情報や契約を求めていると感じたなら、私達は「知りません」「できません」など率直に事実を伝えるべきでしょう。会話が弾んだ後に返事は「ノー」では却って不親切になることもあるからです。第二は、休憩時間や食事の席で日本について話題になる場合です。正しい知識よりも楽しい会話が求められていることを感じとれなければ、生真面目に説明を続けてお互いに疲れてしまったり、「知りません」と答えて会話を味気なくしてしまったりするかも知れません。第三は、親しくなるための、会話のきっかけとしての質問の場合です。ここでは、正確な知識や面白いオチよりも、お互いの正直な意見交換が個人的な理解を深めるのではないでしょうか。

このように、相手の気持ちを感じてその場の文脈に相応しい関わりを持てなければ、せっかく習得した知識も論理も相手の心には伝わりません。言葉や文化を共有する日本人同士ですら、相手の立場や背景を理解して関係を築くのは難しいことです。まして国際的な営みでは、知識や論理的な考え方だけでは限界があるでしょう。一人ひとりが「自分の考え（または国）では正しくて筋が通ったこと」を押し通そうとすれば、争いが起こります。国際化する社会では、知識や論理の土台となる「感じる」心と、感じたことを踏まえて「伝える」技術がいっそう大切になるでしょう。知識や能力は、周囲と折り合いながら自分らしさを表現したり意見を伝達できる感性があってこそ、活きてくるものだと思います。そして、こうした感性は、海外経験や特別な出来事からだけではなく、ゼミやサークルなど大学生活の日常においても磨くことができるのではないでしょうか。



牌を捨てよ、図書館へ行こう

白鷗大学法学部教授
早　野　俊　明

寺山修司を気取ってみても、天賦の才は歴然である。個人の趣味に干渉するつもりは毛頭ないから前段はどうでもいいが、後段は大真面目である。当方の大学図書館に限ったことではないが、多くの学生諸君にとって、失礼ながら、図書館は、試験前の勉強部屋、コピー代行屋、あるいは「教科書」の貸出場所にすぎないのではないか。ビデオ鑑賞もあるかもしれない。いろんな利用方法があってよいが、ここは、金のない、あっても有限であることを知っている者にとっては、月並みな言い方ではあるが、金のかからない、知識の宝庫であり、知的生産の場であり、教員より断然頼りになる空間である。しかし何よりもそこは、一生涯の耆宿に遭遇する出会いの場である。

我が敬愛するコラムニストに山本夏彦がいる。1915年、新体詩人露葉山本三郎の三男として東京下谷根岸に生まれ、昨年10月23日87歳でなくなるまで、月刊「室内」の編集者兼コラムニストであった。山本との出会いは中学校の図書室である。こんな本がなぜそこにあったのか、その本を手にしたのはなぜなのか。「古本屋（「図書室」でも「図書館」でもいい）は、本たちの墓場だという。けれども、そこへ足を踏み入れれば、なん十年来、棚に立ち尽くした本たちは、いっせいに振りむいて、まだ死んでいない表情を示すのである。そして私を無縁の書生と知れば、再びもとに復するけれど、たまには互いに求めていたとわかって、百年の歳月をとびこえることもあるのである」。縁あって互いに求めていたとしか言いようがない。山本は、「女には選挙権はいらない」と語り、男にも同様にいらないと他で述べているのに、差別主義者とレッテルを張られ、青島都政のときに東京都文化賞を逃したくらいだから（後に受賞するも辞退）、いわゆる知識人にはおよそ縁がない。「人は分って自分に不都合なことなら、断じて分ろうとしない」。中学からの愛読者である私は、当然のことながら、このコラムニスト山本夏彦に精神形成上の影響を少なからず受けた。たかがコラムになどという勿れ。ビートたけしはある種の天才だが、彼の言説は山本のパクリである。山本の箴言は、芥川よりもラ・ロシュフコーよりも、人間の深遠なる精神の本質を見抜いている。しかも、日本語の伝統を滅茶苦茶にした岩波言語を弄せず、中学生にも分かる言語で語った。漢学の素養は日本語をこんなにも美しくするものなのかと中学生を唸らせた。本質を言い当てられると人間は普通嫌がる。嫌がらせない言語のテンポとほどがあるなどと小生意気な批評を同級生にしながら人間観察の仕方を多く学んだ。

かくいう私は読書家ではない。本を読むことを辛いと思った者の一人である。自分から活字中毒などと言って憚らない者を見ると、今でも嫌悪する。小学生のときに読んだ本など数える程度しかない。中学に入ってようやく遠藤周作のぐうたらものから純文学へ、漱石、鷗外、志賀、武者小路などいわゆる日本の古典物はそれ以降だから推して知るべし。それでも読書習慣なるものはつかなかった。いやいや仕方なく時間つぶしに受験のために読んでいたものばかりであった。ただ唯一自ら求めて本にありついたのは、山本だけであり、新刊書が待ち遠しかった。大学入試には決して出題されることのない山本を何度も繰り返し読んだ。山本から知った「死んだ人」（古人）にも多く巡り会った。言語は身体に浸透する、精神は融合するということを知ったのは、山本による。ついに発する言語は山本の言語そのままとなった。「今はにせの恋の時代である。にせの恋を本ものと信じ、にせの抱擁を繰返して、やがて死にいたる。人はついに、にせの恋を恋し、にせの死を死ぬことしか許されぬのであろうか。」「善良というものは、たまらぬものだ。危険なものだ。殺せといえば、殺すものだ。」「非は常に他人にあって、みじんも自分になければ、経験が経験にならない。」「汚職は国を滅ぼさないが、正義は国を滅ぼす。」「教えるということは才能である。または技術である。その才能のないものが教えると、教わるものは迷惑する。」「思ったら飯の食いあげになることを、人は思わない。」「あの応接間というもの—あれにはあれなりの意味があった。客をあそこで食いとめたのである。」「言葉は乱用されると、内容を失う。敗戦このかた、平和と民主主義につ

いては言われすぎた。おかげで内容を失った。」「身辺清潔な人は、何事もしない人である。出来ない人である。」「その機会がなかったばかりに潔白だった男女が、その機会があった男女を居丈高にとがめて、自動的にさらに潔白になるのは何より恥ずべきことである。」「歳月は勝手に来て、勝手に去る。ある日とつぜん、私はどっと年とるだろう。しわだらけになるだろう。けれども、それはしわや白髪の勝手である。私の知ったことではない。」「人は言論の是非より、それを言う人数の多寡に左右される。」「権利と義務の両方をおぼえさせたければ、権利を一回教えたら、義務を三回教えなければ、もともとおぼえたくないのだから、おぼえない。両方平等に教えたからいいと思うなら、人情の機微を知らないと評されても仕方がない。」「真の友は友の役に立つことを待つものである。役に立ったことを喜び、恩にきせるどころか役に立ったことを忘れるものである。だから金なら貸せといわれたことをまず喜ぶ。役に立つ機会が天から降ってきたからである。喜んで貸して、貸したことを忘れる。借りたほうも忘れ、今度は反対に貸す身になるとそれを喜び、次いで忘れるからあいこなのである。これが真の友だといわれる。故に真の友は真の恋より稀なのである。」「言葉というものは電光のように通じるもので、それは聞くほうがその言葉を待っているからである。」すべて私の言語であり山本の言語である。もう一周忌か。合掌。

(引用は一連の山本作品による。念のため、山本夏彦著＝植田康夫選『何用あって月世界へ―山本夏彦名言集』［文春文庫 2003年］ご参照のほどを)

図書館からのお知らせ

館内でのマナーを守りましょう!!

最近、館内においてジュース類の持込・大きな声での会話・携帯電話の使用等マナー違反が増加しています。

他の利用者への迷惑とならないように図書館を利用してください。

利用上の注意

- 飲食・喫煙は禁止です。
- 静粛にし、他の利用者の迷惑となる行為は慎んで下さい。
- 資料は大切に扱い、書き込みや切り取りをしないで下さい。
- 資料の無断持ち出しは禁止です。(BDS装置が作動します。)
- 携帯電話の使用は禁止です。
- コピー機は館内資料の複写専用です。

新着図書　ピックアップ

007.6/SA/　「大人のための「情報」教科書」
坂村健、清水謙多郎、越塚登著　数研出版

015/FU/　「図書館活用術」
藤田節子著　日外アソシエーツ

164/TA/　「世界の神話がわかる」
高橋清一［ほか］著　日本文芸社

291.01/AB/　「20世紀の日本の都市地理学」
阿部和俊著　古今書院

304/YO/　「バカの壁」
養老孟司著　新潮社

323.14/OK/　「憲法学への招待」
大隈義和、大江正昭編　青林書院

327.07/CHU/03　「法律家をめざす諸君へ」
中央大学出版部

329.36/OG/　「あなたも国際貢献の主役になれる」
小川秀樹著　日本経済新聞社

335.21/MU/　「日米経営比較」
村田修造著　大学教育出版

K/KO/　「企業変革力」
ジョン・P.コッター著　日経BP社

361.4/NA/　「怒る技術」
中島義道著　PHPエディターズ・グループ

366.29/KA/04　「価値ある資格厳選200」
笠木恵司著　ダイヤモンド社

Y1/YA/　「赤ちゃんは顔をよむ」
山口真美著　紀伊国屋書店

383.8/WA/　「マクドナルドはグローバルか」
ジェームズ・ワトソン編　新曜社

410/ST/　「数学ができる人はこう考える」
シャーマン・スタイン著　白揚社

493.98/TA/　「子どもの栄養と食生活」
高野陽［ほか］著　医歯薬出版

498.51/TA/　「清涼飲料上手な飲み方選び方」
食べもの文化編集部編　芽ばえ社

566.5/OK/　「俺が、つくる！」
岡野雅行著　中経出版

673.8/KA/　「セブン-イレブンの経営史」
川辺信雄著　有斐閣

689.7/KO/　「21世紀のブライダル戦略」
高塚猛著　オータパブリケイションズ

726.5/IK/　「ダヤンの絵本づくり絵本」
池田あきこ著　エム・ピー・シー

E/BE/　「しろねこくん」
べつやくれい著　小学館

837.5/BE/　「「ハリー・ポッター」が英語で楽しく読める本」
クリストファー・ベルトン著　コスモピア

913.6/WA/　「ニワトリを殺すな」
ケビン・D.ワン著　幻冬舎

ささやき

あまり知られていませんが、図書館には“個人学習室”と“グループ学習室”という施設があります。“個人学習室”は申請をせずに自由に利用できます。“グループ学習室”（定員：3名～8名）はカウンターでの事前申請をしてからの利用になります。どちらも館内ですので他の利用者の迷惑にならないようにマナーを守って利用してください。

平成15年10月25日　発行
編　　集　図書館だより編集委員会
発　　行　白鷗大学総合図書館
〒323-8585　栃木県小山市大行寺1117
(0285)22-9737（直通）
ホームページ　http://www.hakuoh.ac.jp
印　　刷　㈱尚文堂印刷所